最高学部（大学部）

2025 年度　自由学園最高学部４年課程卒業研究・２年課程卒業勉強

奈良忠寿

2025 年度最高学部 4 年課程卒業研究は 20 人が 20 のテーマに取り組んだ。2 年課程卒業勉強は 2 人がひとつのテーマに取り組んだ。成果はそれぞれ論文または成果物にまとめられ、2026 年 2 月 21 日（土）に自由学園創立 60 周年記念講堂で開催された報告会で発表された。

Ⅰ．最高学部の卒業研究と卒業勉強とは

自由学園最高学部生は 4 年課程（四年制）・2 年課程（二年制）とも、自由学園での学びの“まとめ”として、最終学年の 1 年間を通して研究活動を行う。研究成果は、論文として纏められるだけでなく、卒業直前に開催する報告会で口頭発表され、論文は自由学園図書館で保管されている。

4 年課程の卒業研究は、3 年次から 2 年間所属する「領域横断研究」「経営実践研究」のゼミナールで進められる。領域横断研究は、最高学部で展開するリベラルアーツを土台とする研究である。「フィールドサイエンス」「ヒューマンサイエンス」「データサイエンス」「ライフスタイル」の各ゼミナールから成り、学生の問題意識や興味・関心に端を発することが多く、設定した研究課題の解決のために必要な専門分野を修得し、特定の専門の枠を超えた研究活動を行うことで創造的に探究する力を養う。

経営実践研究は「マネジメント」ゼミナールから成る。自由学園の教育理念に呼応する経営者像を掲げ、人を大事にし、社会への新たな構想を持ちつつ、事業革新に挑戦する次世代経営者、起業家あるいは社会貢献団体経営者たる資質を養う。マネジメントに所属する学生は 3 年次に学外研修（おもに企業インターンシップ）を行うことが義務付けられている。

2025 年度から、研究成果を論文形式で表現するだけでなく、論文以外の表現も認められるようになった。

卒業勉強のゼミは設置されないが、1 年次の終わりからテーマを話し合い、アドバイザーのもとで 2 年次から毎週定期的に時間をとり、勉強を進めている。

Ⅱ．2025 年度の研究内容

2025 年度の 4 年課程卒業研究と 2 年課程卒業勉強はどのようなものであったか。報告会の予稿集（最高学部 2026）をもとに研究タイトル一覧と一部の研究の概要を紹介する。なお、予稿集の研究タイトルは、提出された論文タイトルと異なるものもあったが、予稿集に掲載されたタイトルとする。自由学園に所蔵された論文タイトルと軽微な差異があることがあるが、そのような事情による。

フィールドサイエンス

5 本の論文が執筆された（次頁タイトル一覧参照）。論文 3・論文 5 は自由学園キャンパスの教育資産に関する研究である。論文 1 は著者がフィールドワークとして 2 か所の地域活動に参加しつつ、参与観察を行った研究である。地域活動の実践者になるという著者が、後期課程で活発に実施した地域活動から得た学びを総合的に取りまとめ、研究として昇華させている。

論文 2 は生物としての蚕から地域の桑畑の変遷、養蚕信仰、初等部・高等部での蚕を使った授業実践への参加まで、他大学の科目聴講、文献調査、インタビュー、フィールドワーク、参与観察等の手法を駆使し、蚕糸業・蚕の価値の歴史的変遷と実態を取りまとめた力作である。現在日本では消滅の危機にある蚕糸業だが、新たな価値が今後も創造され進化する可能性が十分あるとした結論が興味深い。

論文 3 は現在教育的利用が停滞している名栗植林地と植林地の木材活用について、停滞の原因究明と教育的利用の再構築を目指した。インタビュー調査や、教職員向けの見学会の実施、木材活用ガイドラインの策定を検討した。卒業研究で取り上げるには大きなテーマであるが、学生の立場から指導体制・カリキュラム構築・長期的教育ビジョン等に率直な問題意識と改善に向けた提案を取りまとめた。

論文 4 は琉球大学との共同研究により、沖縄での亜熱帯

2025年度　研究タイトル一覧

領域横断研究：フィールドサイエンス

1 地域・コミュニティへの愛着をつくるための「場」が持つ力
―移住・定住促進の観点から―

2 日本における蚕糸業の歴史的変遷と実態調査
―蚕糸業・カイコの現在における価値考察―

3 自由学園「木の学び」の再考
-これからの植林地と木材の活用について-

4 多様な遺伝子型を持つイネ育種素材における
異なる栽培環境への反応から見た適応性の解明

5 地下水の水質から見る自由学園「新天地」の現状

領域横断研究：ヒューマンサイエンス

6 Floating in the Nature ｜たゆたい

7 「社会派」映画の変容から考察するソーシャルドキュメンタリーの意義
－自由学園における上映会の実施を通して－

8 ユニバーサルデザイン実現のためのより良いプロセスの考察

9 茶道とカトリックの繋がりに対する考察

10 次世代による戦争体験継承についての考察
―漫画『おじいちゃんの戦争』を事例として―

領域横断研究：データサイエンス

11 踊りが描くもの　－Sketch of Dancing－

12 自由学園食関連資料群の資料目録と資料解題作成の試み

13 学校における伝承についての一考察
―自由学園旧女子部石畳と創立者の関係―

領域横断研究：ライフスタイル

14 なぜ人はペットを飼うのか
―ペットがもたらす効果に関する研究―

15 子どもたちが楽しいと感じる体操教室の特徴

経営実践研究：マネジメント

16 なぜApple の製品は魅力的なのか
-ブランド共感の形成とその効果に関する研究-

17 エネルギーミックスの地域最適化に関する研究
－再生可能エネルギーの利用の視点から－

18 ヒストリカル・ブランディングによる地域活性化の可能性
-兵庫県城崎温泉を事例に-

19 世代を超えたファミリービジネスの経営戦略に関する研究
－転換期の成功事例の分析から－

20 グミ市場における競争戦略の研究
－カンロと明治を事例として－

2年課程卒業勉強

21 羽仁吉一・もと子夫妻、高村光太郎・智恵子夫妻の夫婦関係を考える
～日本の変遷期の夫婦の在り方～

試験、南沢での温帯試験を実施する計画であったが、定量的な分析が遅れ、当初の研究目的は達成できなかった。また、十分な施設やイネの栽培環境も整わない自由学園での陸畑圃場やポット栽培により行われており、試験精度としては充分ではないと思われるが、その様な環境の中でも遺伝子型によって環境に対する反応が異なってくることを示す結果となっている。

論文 5 はフィールドサイエンスゼミにおいて取得されて来たデータのうち、未利用の水質データを活用した研究である。約 7 年間のデータを解析し、浅層地下水の溶存イオンに季節的な変化がある可能性があること、畑地に投入された肥料分が短期的には地下水に反映されにくい可能性が示唆された。

ヒューマンサイエンス

5 本の論文が執筆された。うち 1 本(論文 6)は絵画制作を通じ、作者の美的価値観・考え方の変遷を示すことを目指した。スケッチを含め 46 作品の小作品群で表現されている。

論文 7 は、「社会派映画」という言葉の歴史的変容を手がかりに、現代におけるソーシャルドキュメンタリーの位置づけと意義を検討し、さらに自由学園での上映会の実践を通して鑑賞体験の変化を分析した。そして、社会問題を人と人との間に立ち現れるものとして捉えなおし、観客が自らの立ち位置から社会を見つめなおす入口を提供する表現であることを示した。

論文 8 は、ユニバーサルデザインを成果物や理念としてではなく、実現プロセスに焦点を当てて検討した。関連文献や実践事例を幅広く収集・精査し、それぞれの立場や方法論を丁寧に読み解きながら整理し、一つのモデルを提示した。

論文 9 は著者自身の経験と実践に根差した問いから出発している。資料による直接的な検証は困難なテーマだが、対象の共通性を単純な影響関係ではなく、同時代での接

触と精神構造の親和性が重なり合って生じた共鳴であると結論付けた点が目を引いた。

論文 10 は著者が二年課程卒業勉強として取り組んだテーマを発展させたものである。著者は在学中一貫して、「戦争体験の継承」に関して実践を続けているが、実践を通じて「非体験世代による継承」の可能性と課題について説得力をもって提示した。

データサイエンス

4 本の論文が執筆された。うち、11 は論文形式ではなく、制作物として表現されている。身体表現であるダンスを光の軌跡として写真撮影することで、ダンスがもつ身体性・空間性を浮かび上がらせ、新たな芸術表現を手にいれた。

論文 12 は自由学園資料室に所蔵されている資料群のうちの 58 冊について、詳細目録をつくり、そのなかの特徴的なものについてはデジタル写真を撮影し、デジタルアーカイブ化を進めるとともに、資料群に対して解題を行い、史料的価値を明らかにしている。

論文13は民俗学的にまた自由学園史的に非常に興味深いテーマであった。伝承や噂がどのように生まれ・伝わり・変化していくのか、生徒の意識の変化だけでなく、行動の変化とも関係するという結論は、興味深い。

ライフスタイル

2 本の論文が執筆された。論文 14 は、ペットが人に与える身体的・精神的な良い影響と、ペットと人の関係性について、文献調査、仮説設定を経て、猫と犬の飼育者へインタビューを行い、考察した。その中で、犬では身体的効果が、猫では心理的効果が重視されていることを指摘し、ペットの効果は動物種や飼育形態に左右されることが示唆されている。

論文 15 は「子どもが楽しいと感じる体操教室とはどのような教室か」という問いを軸に、複数の体操教室を実際に観察・インタビューしながら共通点を整理している。「楽しさ」という曖昧になりやすいテーマを、具体的な実践として捉え直し言語化した点に特徴がある。その「楽しさ」は技術の上達や成果のみから生じるものではなく、指導者のかかわり方や環境づくり、安心感のある人間関係によって形成されているとした。競技性や評価を前提としない部分にも言及した点は、著者が学んできた環境の影響を大きく受けているといえ興味深い。

マネジメント

5 本の論文が執筆された。いずれも 3 年次に学外研修を行い、その成果に基づいた研究であり、仮説の構築とアンケート調査による検証を研究の手法とする。

論文 16 はブランド共感に焦点を当て、対象ブランドに関する情報を整理、理論をレビューしたのちに仮説を設定し、検証した。その過程で、ブランド共感に関係すると思われるブランド・ストーリーを抽出している。

論文 17 はこれからの日本のエネルギーミックス（電源構成）を見据え、再生可能エネルギーに焦点を当てる研究で、現状と政府の目標を確認し、仮説を設定、事例の資料調査を行い検証した。再生可能エネルギー活用の取り組みは、地域の特性を生かし、地域活性化だけでなく自然との融和や地域住民との合意形成などが重要となると指摘した。

論文 18 は、城崎温泉を事例にして、ヒストリカル・ブランディングという理論的枠組みで他の温泉地との比較をすることにより、城崎温泉の特徴と魅力を客観的に浮き彫りにしている。

論文 19 はファミリービジネス中小企業が、市場変化に対応し、世代を超えて経営を継続または転換・成長させているか、事例分析により論じた。

論文 20 はグミ市場に着目し、シェアトップの明治と追随するカンロの競争戦略の違いを、文献調査および店頭調査・アンケートを用いて比較分析し、市場形成期における差別化戦略と競争優位形成の要点を考察した。

2 年課程

二人により 1 本の論文が執筆された。明治期という日本の変革期の夫婦のあり方を考えるため、羽仁吉一・もと子夫妻、高村光太郎・智恵子夫妻の夫婦関係を事例とした。その事例を考えるなかで明らかとなり、両夫妻が乗り越えようとしていた課題は、夫婦のあり方が大きく多様化した現代においても課題であり続けていると論じている。

Ⅲ. 2025 年度の報告会

ここ数年と同様、会場での口頭発表を基本にしつつ、遠隔地からの参加者の利便性のため Zoom を用いたオンライン発表を併用した。今年度の工夫として、各ゼミの発表後に質疑応答の時間を設けると共に、2 つのゼミが発表し終えた後、休憩を兼ねて意見交換の時間も設けた。これは、

意見交換の場の方が、発表者と聴衆のやり取りが活発になる半面、オンライン聴衆がその恩恵を受けられないこと、また質疑応答を聞く中で他の聴衆も理解が深まることがあるといった、双方の利点をうまく取り入れようとした試みであった。結果としてはその試みは成功した印象をうけた。

おわりに

2025 年度の卒業研究・卒業論文を概観してきた。近年の卒業年次生は、自由学園在籍中に自由学園創立 100 周年を迎え、男子部・女子部の共学化も目にしたことからか、自由学園の教育活動が残した史資料を扱うものが目につく。

最高学部の卒業研究・卒業勉強は、身近な経験に基づく視点から、社会的課題に切り込む論考が多く認められることが特徴であるが、論文執筆が自分の自由学園での学びの集大成、アイデンティティー確立と結びついている点もまた特徴である。人間形成を目的とする自由学園の教育が結実しているといえ、先に述べた自由学園の史資料に関する研究も、自身のアイデンティティーの再確認となっているのだろう。今回の研究成果は、自由学園教育史をひも解くあらたな資料として活用が期待される。実際、戦争体験の継承や食関係の資料を用いて、中高等部の主体的な学びが展開されている。自由学園という小さな社会ではあるが、卒業研究によって教育プログラムが「よりよいもの」になっていると言え、学園教育が目指すことが実現されている。

今年度から研究の表現方法として論文形式以外も可能となった。最高学部の卒業研究は自身の自由学園での学びの集大成・アイデンティティー形成に結びついていると再三述べてきたが、制作の課程で「自身にとっての美術とは・ダンスとは」という問いに向き合い、一定の答えをえたことが示されている。執筆者が研究で得たものを今後も育み続けていくことを予感させる。

謝辞

学生の研究指導にお力添え下さったすべての皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げる。あわせて、報告会にご来場のすべての皆さまにあらためて感謝申し上げる。

今年度はヒューマンサイエンスゼミの主任であった木村秀雄先生が、在職中に突然亡くなるという悲しいできごとがあった。卒業研究の途中で指導者を失った学生のへの影響は甚大であったが、予稿集にはゼミ生一同による追悼文が寄せられ、論文の完成を報告できたことはなによりの手向けとなった。木村先生の長年にわたるご指導に深く感謝するとともに、ご冥福を心より祈る。

参考文献

自由学園最高学部　2026『2025 年度　卒業勉強・卒業研究報告会　予稿集』